

【国語・文学教育部門】

0806 教室 一三時二〇分開始

歌唱の「声」が紡ぐ「心象」の変容に関する探究

——生成AIによるSNS変換がもたらす「響き」と「意味」の再構築

西山 昇希

本発表は、J-POP等の楽曲を対象に、生成AIによる「文体変換」が聴き手の心象に与える影響を分析し、国語科と音楽科の教科横断的な学びの可能性を提示するものである。

近年の楽曲は映像やSNSと密接に消費されているが、本研究ではあえてAIを用いて歌詞を「事務連絡」や「SNSの投稿風」へと変換・脱構築する。

その過程で、元来の「歌唱」や「旋律」が担っていた叙情性がいかに削ぎ落とされるかを可視化する。

実践に代わり、AIを擬似生徒とするHITL (Human-in-the-Loop) モデル

を採用。この「無機質な超訳」への違和感を起点に、旋律と結びついた「声」が紡ぐ多義的な心象を再発見するプロセスを理論的に構築した。

分析の結果、この「異化」が、日常言語と芸術的表現の境界を意識させ、生徒のマルチモーダル・リテラシーを深化させる「鏡」として機能することを明らかにする。

(都留文科大学大学院)

AI時代の国語教育

柄山 紀子

前任校である中高一貫校の中三と高一、現任校の高三の各学年において三大歌集(万葉集・古今和歌集・新古今和歌集)を学ぶ際、班の担当和歌と「何らかの意味で」共通する和歌をさがすことから出発する発表授業を行ってきた(中三の授業について拙稿「生

徒の視点に見る古典学習の可能性——共通点がある和歌の選択から出発して」日本文学二〇二一年七〇巻一号)。ところが、二〇二五年度の高校二年の授業において、生徒が生成AIを使用して和歌を検索しようとした結果、生成AIがあたかも三大歌集の真正な和歌であるかのように作成したものを、生徒が信じてレジュメに載せようとしている複数例を授業者は発見した。

この事象を起点として、生成AIを使うことが当たり前のこととなっていく今、国語教育における書籍の効果的な使い方や生成AIとのつきあい方、教員の役割や教科書の工夫について論じたい。

(東京都立江戸川高等学校)

国語教育における他者概念の批判的検討

——動物表象をめぐる文学教材の読解を手がかりに——

田中 秀憲

本報告は、国語教育における他者概念を、文学教材における動物表象の読解を手がかりに再検討するものである。国語教育研究では、他者理解や対話を通じた主体形成が重要な理念として位置づけられてきたが、その際に想定される他者は、相互理解の成立を前提とする「固有の他者」として構想されてきた。本報告では、国語教育における「他者」概念の規範性という課題意識を踏まえ、とりわけ動物が登場する文学教材に着目する。国語科教材にしばしば登場する動物というキャラクターは多様な解釈を誘発しうるにもかかわらず、国語教育においては一定の教育的解釈が蓄積され、しばしば主体形成の枠組みの中に位置づけられてきた。このような読解の枠組みを国語教育における他者概念の構築と関連づけ

て問い直し、批判的動物研究および現代思想の他者論・動物論を手がかりに、動物文学教材におけるオルタナティブな読みの可能性を検討する。

(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

国語教科書の中の大江健三郎

——高等学校国語の教科書掲載教材を題材として——

上村 文人

二〇二三年三月に死去した大江健三郎は、戦後社会と向き合い、言語表現に粘り強く取り組んだ作家である。私たちが普段取り組む国語の授業とは、教師と生徒が言葉の学習を通じて自己と他者との関係や社会の在り方を考える時間である。本発表は、言葉に対する省察を通じて自己と他者との関係や社会の在り方に対する問いかけの契機

を生み出す大江の教科書教材を取り上げ、現場での実践を再考したい。本発表では、一九六〇年代より現在に至るまでの大江の教科書教材を多角的に検討するために、次の四つの視点をふまえた。すなわち、《当時の学習指導要領》《教科書をめぐる状況》《大江の位相》《同時代の社会状況》である。これらの視点をふまえると、時期によって大江の教科書教材の特徴が変化していることが分かる。またこのことを通じて見えてくると思われる国語教育との向き合い方を本発表を通じて考察していく。

(東京都立北園高等学校)